

氏名	フジ 藤	タ 田	サ 紗	ヨ 代
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第334号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位論文等題目	〈作品〉「砦」－入口－路－橋－ 〈論文〉 场景のかたち－ガラスによる光の表現－			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	島田文雄
（論文第1副査）	〃	准教授	（ 〃 ）	小松佳代子
（作品第1副査）	〃	講師	（ 〃 ）	藤原信幸
（副査）	〃	教授	（ 〃 ）	橋本明夫
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	田中一幸

（論文内容の要旨）

本論文は、かたちが生まれるまでの思考と制作過程の記録を、修了作品「砦」の制作を軸に書き記し、私の制作の意味について考察するものである。

私の制作とは、目の前の场景と向き合い、自分自身の感覚に即して、场景の持つ雰囲気をとらえてかたちにし、そのときに得た感情がどのようなものだったのかを把握しようとする試みである。

本論文では、まだその風景に感動や感情を含めない、察知したままの風景を场景とする。私たちは場景をとらえると、美しいと思ったり、汚いと思ったり、何かしらの感情を抱く。場景をとらえた後に生じるこのような感情を伴った風景を情景とする。私は場景から、心の高揚を誘う雰囲気をとらえると、立体的なイメージを連想し、そのイメージを基にかたちを起こす。かたちにする過程において、私は場景から受けた感情を把握し、その場景は私にとって特別な意味を持つ情景へと変わる。情景を場景のかたちによって表現することが、私の制作理念とすることができる。

かたちにするために、私はガラスを用いる。ガラスは、透明という特徴を持ち、透明度を利用することで、光の行方と量を操ることができる素材である。そのために、ガラスは多様な表情を作り出すことができる。特に私が着目しているのは、透明と不透明、磨かれてつるつるとした手触りと荒らされてざらざらとした手触り、色の濃淡などの両極ともいえる表情を、同一のかたちの中にガラスで混在させることだ。時にはなだらかな変化で、時には大胆な対比で、これらの表情を表現できることが、私にとってガラスが非常に魅力的な素材である理由だ。

本論文は四章で構成される。第一章から第三章において、私の制作にとって不可欠な要素である感覚・かたち・素材について、それぞれ考察した。その上で、第四章において修了作品の制作の記録を通して、考察したことを実証した。

はじめに、私の夢に対する不安が制作の動機であることについて触れ、私にとっての制作の意味を提示した。

第一章では、私の制作の対象となる場景を定義し、場景をとらえるための方法について考察を行った。何かを思いつくととき、または何かに反応するとき、私は直感に頼ることが多い。その直感が、全身の知覚システムの連動作用によって成り立っていることを論じた。直感がとらえているものは、場景の独特の雰囲気であり、それらの雰囲気を特徴づける要素を雰囲気の質とし、成り立ちの異なる環境について、それぞれの雰囲気の質を検証した。さらに、私の修士課程の修了作品を参照しつつ、非日常的な雰囲気

の質に直感は強く反応することを述べた。

第二章では、私が惹かれるかたちを構成する要素を挙げ、空間表現としてのかたちについて考察した。まず、反りと張りという変形によるかたちについて述べた。反りと張りは、加えられた力に対して素材が耐えることで生じる変形である。変形に伴う柔軟性を含んだ緊張感に、私は美しさを感じている。次に、かたちとかたちの間の何もない空間にも、間という造形表現が存在することに注目した。私自身の過去の作品を分析し、私の作品のかたちの特徴と、そのかたちによってもたらされる表現について述べた。

第三章では、ガラス独特の特徴を示し、素材についての考察を行った。ガラスの表情と印象は、光の透過度合いによって決定され、多様化している。ガラスが熱によって表情を変えることに触れ、制作現場で私が実際に体験している素材との対話を記述し、私がガラスをどのようなものとしてとらえているかを述べた。

第四章で、修了作品「砦」の制作を通して、私の制作意図と世界観を述べた。この作品で選んだ背景は、私が大学院の修士、博士課程の五年間を過ごした東京藝術大学の取手校地である。この場所から要塞のような雰囲気を感じとってから、かたちになるまでの制作過程と研究成果の記録を記した。

私が直感でとらえた背景の雰囲気は、目に見て、または手で触って説明することはできない。そのような曖昧な存在である雰囲気が、ガラスによってひとつの現実的な現象であるかたちとして表現され、私にとって実感のある現実の記録となって、現在という時空間に還元される過程こそが私の一連の制作であることを示し、本論文の結論とした。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、筆者自身が作品制作において制作の出発点となる背景がかたちになる内的プロセス、筆者がとるガラス造形という技法、さらには筆者自身による作品分析まで含んでいる。筆者がこれまで制作に向き合う中で感じ考えてきたことを博士課程修了にあたって言語化して総括する、制作者ならではの論文になっている。自らが背景から得た感覚や感情を重視する筆者にとって、それを忠実に言葉にするということは容易ならざる作業であったであろうが、主観的な感情や、制作において経験的・身体的に得ている感覚を可能な限り客観的に記述するという困難な課題に挑戦した好論文である。

第1章では、感動や感情をもつ以前の見たままの風景を「背景」と名付け、その背景から直観によって雰囲気の質を感じ取ってかたちにしていくまでの感覚と、作品化されるような雰囲気の質が何故に生じるのかについて分析している。潜在的な美意識という判断基準で捉えられた背景をかたちにすることは、筆者自身の記憶や感情にかたちを通して気づく営みでもある。

第2章では、筆者のこれまでの作品を振り返りながら、筆者が魅力を感じるかたちの内実について分析している。反りや張りといった変形、制作の痕跡が表れたかたち、そしてかたち同士のあいだに生まれる間といったそれぞれの要素は、すべて筆者の博士課程修了作品に取り入れられており、本章は修了作品へと結実する筆者の造形観を明らかにするものとなっている。

第3章では、ガラス造形という技法の特徴を記述している。ガラスの持つ光の透過性、熱による変形、粒子の大きさに応じた色の濃淡など、筆者がガラス造形の魅力として取り上げる要素もまた、すべて修了作品において表現されている。その意味で本章は第2章とともに、最終章で分析される修了作品の造形・技法を原理的に説明するものとなっている。

第4章は、3点1組で制作された筆者の修了作品「砦」について、それぞれの作品のコンセプトと技法、制作工程を丁寧に追ったものである。フロートガラスという素材、ガラスを鑄込むための型の成型やスランピング技法による焼成方法などについて、ガラス造形を専門とする者にとって参考となる貴重な資料を含むとともに、広く一般にガラス造形の制作技法や魅力についてわかりやすく説明するものと

なっている。また、筆者が素材とのやりとりのなかで感じているリズムや感覚についても言及することで、制作過程における制作者の独特な意識様態を知ることができる。

提出論文はこのように、筆者の作品制作における制作の起点から、制作過程における制作者の内的世界、さらに作品制作に日々向き合うなかで得られた造形や技法への考察など、制作者にしか書けない論文である。制作者が作品制作のみならずその分析を徹底的に行ったからこそ生まれた本論文は、課程博士論文として優れたものであることを審査員全員一致で評価し合格と判定した。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、通称フロートガラスと呼ばれる建材として流通している板ガラスを使用して制作された。現在、ガラス造形分野で用いられる多様な種類のガラスの中、フロートガラスを用いた新しい見せ方であり、多様なガラス造形技法の中で、主にキルンワークを使用した制作の新しい可能性を感じさせる。

ガラスという素材の特異性、金属のように溶解温度を持たず、温度の変化による粘性の変化とガラス独特の鑄造性を巧みに組み合わせ、作者の内在于るテーマに即した立体表現を実現した。

作者は、本作品制作の為に用いた技術、方法論を獲得するために、本作品制作に至るまでに、一般の工芸ガラスに使用されるソーダガラス等の他ガラス素材との比較研究、溶解したガラスを用いるホットワークなど異なる技法を駆使した制作研究を重ね、フロートガラスを用いる必然性や意味などを導き出している。その結果として、作品から感じられるガラスの表情の複雑さや奥深さ、ディテールの繊細さなどに独特な魅力を出せていると評価した。鑄造されたフロートガラスの持つ色味、透明感など、鑄造の際のガラスの粒度や温度の管理による工夫で、光の魅力的な効果を作品に与えられていることは特筆できる。

また、ガラス鑄造法とスランピング（熱変化による変形を利用した技法）技法における、型材料の工夫と応用がなされ、これらは一つの体系としてまとめられる可能性を感じた。作者の今後の課題となるであろう。

本作は、自身のストーリーを展開する3部作による作品構成がなされているが、「入口」の奥行き、重量感、完成度から比べると「路」と「橋」においては、作品の構成や展示法、構造の見せ方など、まだ工夫できる部分を残していると感じた。しかしながら、作者の感性と、作者が日頃から感じている制作の動機という個人的な事柄を率直に提示し、ガラス素材の特性、技法的特性を巧みに組み合わせ、形を熟考することを通し造形化し、他者との共有への働きかけを積極的に行っている姿勢は好ましいと感じた。

以上のような観点から、藤田紗代の本作品「砦」は、博士課程の修了作品として博士号授与に相当すると評価した。

(総合審査結果の要旨)

論文は4章によって構成されている。第1章「場からかたちへ」、作者の感じた場を作者の感覚によってどのように感じるのか自らの思考を分析。第2章「形とちからのバランス」、作者が魅かれる形を構成する要素を取り上げ考察。第3章「ガラスの特性と表情」、ガラスの素材について考察。ガラスの魅力を実体験から考察。第4章「終了作品『砦』のかたち」作品の制作意図と作者の世界観、技法、材料について作者の核心的な制作意図を考察。作者の論文は内省的な、自己を見つめ直して考察する論調で貫かれている、論文と言うより制作そのものに主眼がおかれている制作ノートの論調である。しかし、制作者のバックグラウンドからどのように作品が生み出されるのかといった制作動機、その展開、工芸的な材用の吟味、制作方法の考察など、精神面での考察と、ガラス素材との対話、形態の対話など、自

己との対話を素直に推考された論文で、ガラス作家としての特異性を兼ね備えた質の高い論文と評価できる。

作品「砦」は、それぞれに副題がついた3部作からなる。「入口」は穴を通り抜け向こうの世界へ入る。穴は出口と言うよりも入口の印象が強い。作品は2種類のパーツを組み合わせ制作している。中央の入口の部分は一枚板のガラスを溶着させ、入口を形成しており外壁はキャスティング技法でガラスの粒子を変化させながら表現している。この際に生じたバリを造形と考え、ガラス特有の質感を軽く見せる効果を表出している。その分入口の印象が希薄になっているきらいがある。作者は以前は自分の追い求める形を追求してきたが、本制作を通じて、その場その場の形状の変化を楽しむゆとりができ、作品に幅をもたらしている。「路」は連なる塊の中を一つの軌跡が通っている形を連想し、まるで飛行機がいくつもの厚い雲を通り抜けていく軌跡を一つの路と感じて制作している。作者の現象風景を作品化したもので、かたちが形をとどめず流れ動くと言う印象のもと制作している。ごつごつと起伏のある塊からもろく崩れそうなバリの繊細さを効率よく自己表現に結び付けている。「橋」放物線を描く虹のような橋板をかけて、外の世界につながろうとする形を連想した作品である。作品は、神社や寺の持つ現実とはかけ離れた世界、境界に踏み込むことを鑑賞者に暗示させるコンセプトで制作されている。橋台から延びる橋板は虹を連想することによって彼岸の橋台と向こう側の世界を連想させる形態。タイトルの砦は、取手校地の第一印象が起点となって本作品に表現された作品で、自己のコンセプトに基づいて素直に吟味し、熟考を重ねた優れた作品であると判断できる。よって藤田紗代の論文、作品は博士号授与に相当する。